

# 異界の存在と暦上儀礼

塚 崎 今日子

## はじめに

北ロシアおよびシベリアのフォークロアにおけるシュリクン шуликун と、南スラヴのフォークロアにおけるルサールカ русалка は、民間伝承に登場するいわゆる「妖怪」の類である。これらは、「一定の時期 [シュリクン→スヴァートキ (旧暦<sup>1</sup> 12月25日のクリスマスから1月6日の洗礼祭まで) / ルサールカ→聖霊降臨祭 (復活祭後7番目の日曜。5月下旬から6月下旬に当たる)] に水中から現われる存在」として共通の時空間的特徴を持っている。しかし、他の要素 (容姿、行為等) においては大きく異なる。本報告の目的は、これらの異界の存在における共通性と差異について、特に暦上儀礼の点から解釈を加えることである。

筆者は、シュリクンおよびルサールカに関する具体的な特徴分析については、すでに以下の諸資料に基いて別の機会に報告を行っている<sup>2</sup>。すなわち、シュリクンに関しては19世紀後半から20世紀初頭に採録されたフォークロア資料<sup>3</sup>、および20世紀80年代<sup>4</sup>、90年代に採録された資料<sup>5</sup>。ルサールカに関しては19世紀後半から20世紀初頭に採録された資料<sup>6</sup>、20世紀後半に採録された資料<sup>7</sup>である。本報告は以上の研究報告および資料に基いている。

<sup>1</sup> ユリウス暦のこと。ロシアでグレゴリウス暦 (新暦) が用いられるようになったのは1918年2月以降である。旧暦の月日の数え方は、新暦より19世紀で12日、20世紀、21世紀で13日遅れている。

<sup>2</sup> 塚崎今日子「シュリクンとその現代的機能——アルハンゲリスク州ヴェルフニャヤトイマ地区調査から——」『スラヴ研究』〈49〉、2000：213-244；「ルサールカ：俗信・儀礼・文学」北海道大学スラヴ研究センター専任研究員セミナー、2002年3月27日。

フォークロア資料におけるシュリクンとルサールカの主要なイメージをまとめると、次のようになる。シュリクンは、「スヴァートキに水中から地上に現われる」「小さく」「尖った頭部」を持ち、「複数」で「地上を徘徊」し「人間に悪戯をする」存在として主に登場する。一方ルサールカは、「聖霊降臨祭の時期に水中から地上に現われる」「絶世の美女」、もしくは正反対の「醜い老女」で、「畑」「森」「墓地」「水辺」などにおいて「人間に致命的な害を及ぼす」存在として主に登場する。特に、「自殺した女」や「死んだ赤ん坊や子ども」が死後ルサールカになるとも伝えられている。

## 1. シュリクンとルサールカ：時空間的特徴

まず、シュリクンとルサールカの空間的特徴であるが、これらが一定の時期に出てくる「水中」という空間は、水の主（精霊）ヴォジャノイ водяной における「水中」とは異なる意味を持っている。フォークロア資料において、シュリクンやルサールカが、ヴォジャノイのように「河川の状態に影響を与える」「漁の収穫を左右する」「漁師や粉屋などから生贄を捧げられる」といった、「水や水中のモノに対して特別な力を行使する」という内容は見られない。スラヴ地域においては、「水中」を「あの世／カオス」と見なして執り行われる儀礼は多く、また一定の時期に異界の存在が「水中」から現われるという俗信は多い。

<sup>3</sup> 主要な出典としては以下が挙げられる。Зеленин Д. К. Загадочные водяные демоны «шуликуны» у русских // *Lud Słowiański*. -Kraków, 1930, -t.1, -z.2, -dział V, -s. B220-B238; Толстой Н. И. Заметки по славянской демонологии. 3. Откуда название шуликун? // *Восточные славяне: языки, история, культура: К 85-летию академика В. И. Борковского*. -М., 1985, -С.278-286.

<sup>4</sup> Черепанова О. А. Мифологические рассказы и легенды Русского Севера. -СПб., 1996.

<sup>5</sup> 1995年、1996年、2000年にアルハンゲリスク州ヴェルフニャトイマ地区で実施されたフォークロア調査資料（1996年、2000年調査には筆者も参加）。

<sup>6</sup> Зеленин Д. К. Избранные труды: Очерки русской мифологии: Умершие неестественною смертью и русалки. -М., 1995（初版1916年）。

<sup>7</sup> 主要な出典としては以下が挙げられる。Виноградова Л. Н. Народная демонология и мифоритуальная традиция славян. -М., 2000; Черепанова О. А. Мифологические рассказы...

たとえば、「悪魔が一定の時期に水中から出てくる」<sup>8</sup>といった伝承は広く知られ、ベラルーシでは洗礼祭の時期に水中から悪魔が出てきて柳の木の上に移ると伝えられている<sup>9</sup>。また筆者自身、1998年コストロマ州調査において、「スヴァートキは洗礼祭までだが、その日は水を清める。水が清められるとあらゆる不浄な存在が（水中から—筆者）自分の住まいに去っていく。レーシィも、魔女も、サタンも、悪魔も、皆全て洗礼祭の後は去っていく」という話を採録している。シュリクンとルサルカの一定時期における「水中」からの出現は、このような「死の観念と結び付いたあの世／カオス（＝水中）からの異界の存在の出現」の一例と捉えられる。ここで注意しなければならないのは、シュリクンとルサルカにおいては、「水中」に「存在する」というイメージが欠如している点である。すなわち、スヴァートキないし聖霊降臨祭の時期が終了し、水中に入った、つまり人間の前から姿を消した時点で、これらは存在すること自体を停止し、1年後まで無の状態にあるとあってよい。

次に時間的特徴を見てみたい。まず民間暦において、冬至（クリスマス）と夏至（聖ヨハネ祭）が特に対称性を持つ祭日で、儀礼内容も類似していることはよく知られる<sup>10</sup>。スラヴの民間信仰においては、一年を二分し、異教的にもキリスト教的にもきわめて重要な意義を持つこれらの境界的時間が、異界の存在の出現と結び付けられている例は多く見られる。たとえば、セルビアのB.カラジッチによれば、吸血鬼 *вукодлак* は特に冬のクリスマスからキリスト昇天祭（復活祭後40日目）までの時期にいるという<sup>11</sup>。ポーランドにおいては、変身的能力を持つ人間が狼に化けるのは年に2回、クリスマスと聖ヨハネ祭の前夜であると伝えられた<sup>12</sup>。ブルガリア東部では、イグナーチィの日（旧暦12月20日）

<sup>8</sup> Власова М. Новая абевега русских суеверий. -СПб., 1995, -С.346; Новичкова Т. А. Русский демонологический словарь. -СПб., 1995, -С.606.

<sup>9</sup> Зеленин Д. К. Загадочные водяные демоны «шуликуны»..., -с. В234.

<sup>10</sup> Толстой, Н. И. Времени магический круг (по представлениям славян) // Логический анализ языка: Язык и время. -М., 1997, -С.23.

<sup>11</sup> Караџић В. Српски речник: 1852. -Београд, 1986, -С.132

<sup>12</sup> Афанасьев А. Н. Поэтические воззрения славян на природу. -М., 1994, -Т.3. (初版1869

からクリスマスにかけては、カラコンジュル караконджул と呼ばれる存在が地上に出てくるといわれ、これらを追い払うために仮装をした人間が家々を回った<sup>13</sup>。また、「スラヴ人およびバルト人の人狼信仰に関連して注目されるのは、古い伝承ほど人狼の出現を一年の一定の時期、特にクリスマス前後に限定していることである」という指摘も見られる<sup>14</sup>。南スラヴでは、クリスマス前夜に魔女が活発化し、饗宴をし、天空から星と月を掠め取り、家々や穀物小屋を荒らし回ると考えられた。さらに全スラヴで見られる俗信としては、聖ヨハネ祭の前夜に反キリスト教的存在、特に魔法使いや魔女が集会のために空を飛び交い、牛の乳や畑のものを盗んだり、旱魃や悪天候を招くとされ、北ロシアではレーシイが現われるのは一年のうちスヴァートキと聖ヨハネ祭前夜の二度であるといわれた<sup>15</sup>。冬至期に無数の妖怪や死者が「この世」にやってきて徘徊するというイメージは、スラヴに限らずヨーロッパにおいても広く流布しており<sup>16</sup>、冬至には「天空に裂け目が生じ」、そこから「あの世」の妖怪や死者が大挙して「この世」にやってきて地上を徘徊する、という民間信仰もある<sup>17</sup>。

ところで、夏至（聖ヨハネ祭）以外に、スヴァートキと対称的に捉えられている期間がいまひとつある。それが聖霊降臨祭の時期である。これらの時期が対の形でイメージされていることは、ロシアにおいては冬のスヴァートキに対して、聖霊降臨祭の時期が「緑のスヴァートキ Зелёные святки」という名で親しまれている点に特に顕著に表われている。先行研究を参照しつつ、以上の祝祭日（期間）の対称関係を図示すると次のようになる<sup>18</sup>。

---

年), -С.528.

<sup>13</sup> Толстой, Н.И.(ред.) Славянские древности. -М., 1999, -Т.2.

<sup>14</sup> 伊東一郎「スラヴ人における人狼信仰」『国立民族学博物館研究報告』、6巻4号、1981：785。

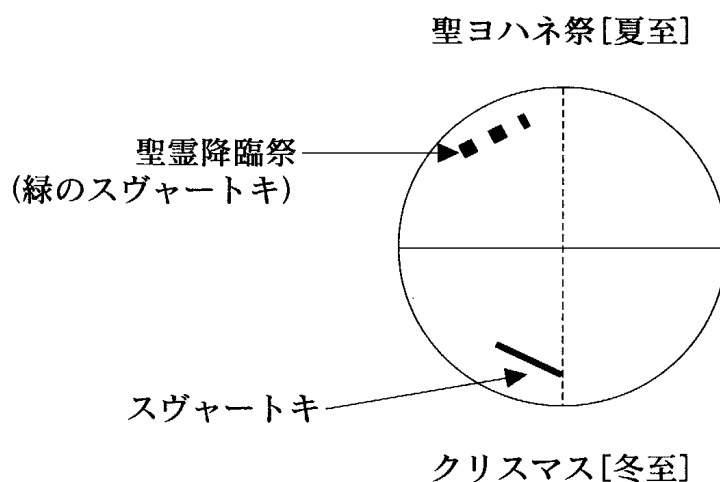
<sup>15</sup> Виноградова Л. Н. Мифология календарного времени в фольклоре и верованиях славян// Славянский альманах. -М., 1997, -С.148.

<sup>16</sup> Серов С. Я. Календарный праздник и его место в европейской народной культуре// Календарные обряды в странах зарубежной Европы. -М., 1983, -С.47.

<sup>17</sup> Виноградова Л. Н. Народная демонология и..., -С.100.

<sup>18</sup> 伊東一郎「ルサルカ・ルサーリヤ・ポルードニツァ——スラヴ神話における時間の人格

〔図表 1〕



スヴァートキと聖霊降臨祭の対称性については、16 世紀から 19 世紀までのロシアの冬季儀礼について詳細なモノグラフを著わした B. И. チーチェロフも次のように指摘している。

「ルーシにおける庶民的伝承、儀礼、習慣、俗信をよく知るようになると、日時の繰り返しという観念に到る。すでに И. サハロフ (19 世紀のロシアの民俗学者—筆者) の時代から採録者や研究者たちはこのことに気付いていた。たとえば、クリスマスのスヴァートキは、『緑の(スヴァートキ—筆者)』と呼ばれる夏もしくは春 (6 月末頃、聖霊降臨祭の時期) の儀礼と対応している。民衆は当然のこととして、聖なる (「スヴァトイ святой」—筆者) 名前を冠したこれらの期間を暦の上での繰り返しとして認識していた。(後略)」<sup>19</sup> (下線は筆者)

この指摘に続いてチーチェロフは、1 年を 3 月～7 月と 10 月～1 月に二分

化をめぐる『なろうど』 ロシア・フォークロア談話会会報 35 号、1997：17；Толстой, Н.И. Времени магический круг..., -С.21.

<sup>19</sup> Чичеров В. И. Зимний период русского земледельческого календаря XVI-XIX веков. -М., 1957, -С.16.

し、それぞれの時期の祝祭日や儀礼の名称や内容が呼応していることを示し、ロシアの暦においては1年の流れが二つのサイクルに分けられることを明らかにしている<sup>20</sup>。その記述に基いて作成したのが〔図表2〕である（特に対称性が顕著な部分には二重線を引いた）。

〔図表2〕

月/日 (旧暦)	祝祭・儀礼	月/日 (旧暦)	祝祭・儀礼
3/1	アヴドーチャ（エヴドーキヤ）の日	10/1	聖母庇護祭（聖母庇護祭からエヴドーキヤの日までは金の貸借期間）
/7	ヘルソンのワシーリイの日（この日から春が始まる）	/7	セルゲイの日（この日から冬が始まる）
/9	40 聖人の日（鳥が春を運んでくる／昼と夜が交代する／冬が終わり春が始まる）	/9	使徒ヤコブの日（ヤコブが襖、霰をもたらす）
/25	聖母受胎告知祭（女性の祭り。女性の労働禁止／どんな夏が来るかが分かる）	/22	カザンの聖母の日（どんな冬になるか、何時そり道がつくかが分かる）
/27	ソルンスカヤ夫人の日（カワカマスが尾で氷を割る）	/28	パラスケーヴァ・ビャートニツァ（女性の労働禁止）
		/26	ドミトリイ・ソルンスキイの日（渡し舟を待つ者はいない／川が凍り始める）
4/1	エジプトのマリアの日（家の精ドモヴォイが目覚める日、もてなす必要がある）	11/1	クジマとデミヤンの日（ドモヴォイを慰める儀礼が行われる）
/8	} 春の暖かさが始まるとされる祝祭日	/9	} 冬の寒さが始まるとされる祝祭日
/11		/11	
/12		/12	
/23	春のゲオルギウス（エゴーリイ、ユーリイ）祭（「エゴーリイは橋とともに、ニコラは釘とともに来る」と言われる）	/26	冬のゲオルギウス祭（「エゴーリイは暖かさとともに、ニコラは飼料とともに来る」と言われる）
「ロシアには二人のエゴーリイ、寒がりエゴーリイと腹ぺこエゴーリイ」「ユーリイが仕事を始めさせ、ユーリイが終わらせる」と言われる			

<sup>20</sup> Чичеров В. И. Зимний период..., -С.17-18.

異界の存在と暦上儀礼（塚崎今日子）

5/9	聖ニコラ（ミコラ）の聖骸移動の日（「春のニコラ」と呼ばれる）	12/6	聖ニコラの日（「冬が来るのはニコラの日の後」と言われる）
	「ニコラは二人。一人は草花のニコラ、もう一人は厳寒ニコラ。一人は草花とともに、もう一人は冬とともに」「冬のニコラは馬を小屋に追い、夏のニコラは餌をやる」と言われる。		
6/12	オヌーフリィとアフォンのパテロの日（「陽が短くなり、月が長くなる」と言われる）	12/12	主教スピリドンの日（「昼が雀の足取りで長くなってくる」と言われる）
6/24 /29 7/20	<div>洗礼者ヨハネ祭 使徒ペテロとパウロの日 聖エリヤ祭</div> <div>↓</div> <div>緑のスヴァートキの期間</div> <div>（結婚と収穫に関する予兆と占いが行われる／「洗礼者ヨハネの誕生日には夜明けに太陽が戯れている」と言われる／洗礼者ヨハネ祭には川や露で水浴びをする／聖エリヤ祭には労働禁止）</div>	12/24 /25 1/1 1/6	<div>クリスマス・イヴ クリスマス 聖バシレイオス祭（新年） 洗礼祭</div> <div>↓</div> <div>スヴァートキの期間</div> <div>（新年に関する予兆と占いが行われる／「クリスマスには夜明けに太陽が戯れている」と言われる／洗礼祭には『ヨルダン』で水浴びをする／クリスマスと洗礼祭には労働禁止）</div>
7/4	大主教アンドレイの日（ <u>1年の蓄えが終わる</u> 日と言われる）	1/16 /24	使徒ペテロの枷を祭る日 聖母クセーニヤの日（これらの日には <u>半年分の蓄えが無くなる</u> と言われる）

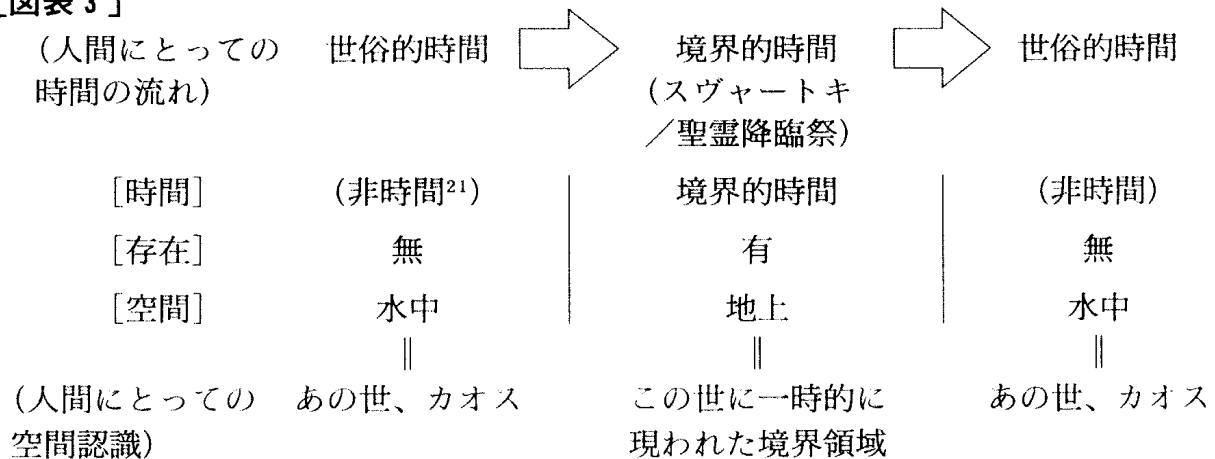
「緑のスヴァートキ」と「(冬の) スヴァートキ」の対応について記述する際、チーチェロフは移動祭日である聖霊降臨祭を省いているが、先の引用からも、彼が聖霊降臨祭を「緑のスヴァートキ」の中に含めて考えていたことは明らかである。こうして見ると、「スヴァートキ」と「緑のスヴァートキ」という呼称の対応は偶然的なものではなく、自然な時間感覚の流れから生じたものであることが分かる。

聖霊降臨祭はスヴァートキと同様、特に多くの儀礼的行為が行われる境界性の強い時期として認識されており、クリスマスや聖ヨハネ祭と同様、「この世」と「あの世」の境が曖昧となり異界の存在が現われやすい時間でもある。すなわちスヴァートキと聖霊降臨祭は、①1年のサイクルの中で対応する点、②共

に強い境界性を持つ点において、同質といえる。

以上を総合してみると、シュリクンとルサルカが同質の時空間を共有していることが分かる。両者は一定の（時期は異なるが同質の）境界的時間に、「死の観念と結びついた全くのカオス（あの世）」としての「水中」から、「地上に一時的に出現した境界領域」に現われ、その期間が終わると再び「水中」に戻る存在である。しかし彼らが「水中」に「いる／住む／存在する」というイメージは希薄で、特定の境界的時間に地上に出現した境界領域においてのみ、無から有の状態になる。この時空間の流れを整理したのが〔図表3〕である。

〔図表3〕



さて、この図の上ではまったく同じ時空間を共有するシュリクンとルサルカであるにも拘らず、「境界的時間／有／地上」という中央縦軸において取り上げてみると、その属性（容姿、行為等）には大きな違いが見られる。それらの差異を暦上儀礼との関わりから考察してみたい。

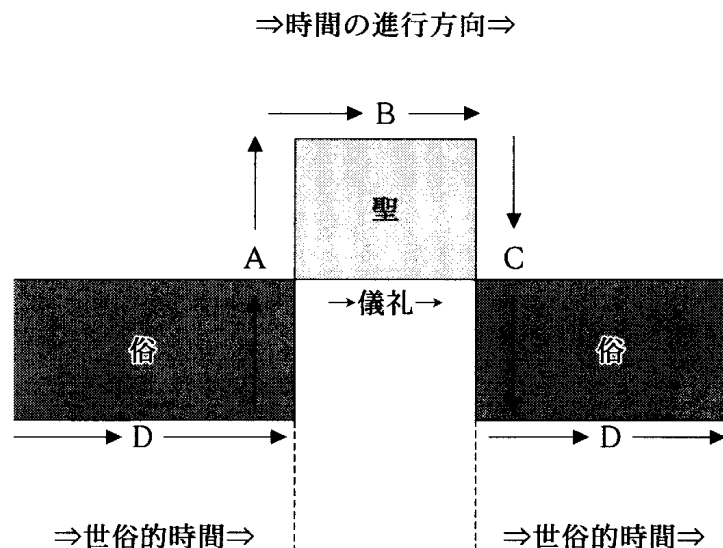
<sup>21</sup> C. M. トルスタヤによれば、「空間と同様、時間は意味内容によって分割化、聖別化され、主として『死』と『生』によってコード化される完結したシステムの中に組み込まれる。時間とは一この世、こちら側の世界、生きるものの世界、に固有のカテゴリーであり、あの世に時間は存在しない。あの世には如何なる運動も変化もないのである」（下線は筆者）。筆者もこの点には同意見であり、それをこの図では「非時間」という表現で表した。Толстая С. М. Мифология и аксиология времени в славянской народной культуре//Культура и история: Славянский мир. -М., 1997, -С.65.



## 2. シュリクンとルサルカ：暦上儀礼との関わり

まず異界の存在における時空間の構造と、儀礼における時空間の構造との対応性に注目したい。E. リーチはファン・ヘネップの通過儀礼における三段階（分離→死→再生）理論を暦上儀礼に応用し、時間の流れに沿った暦上儀礼の参加者（参加する社会全体）の状態を図示し、それぞれの局面について解説を加えた。それが〔図表4〕である。

〔図表4〕



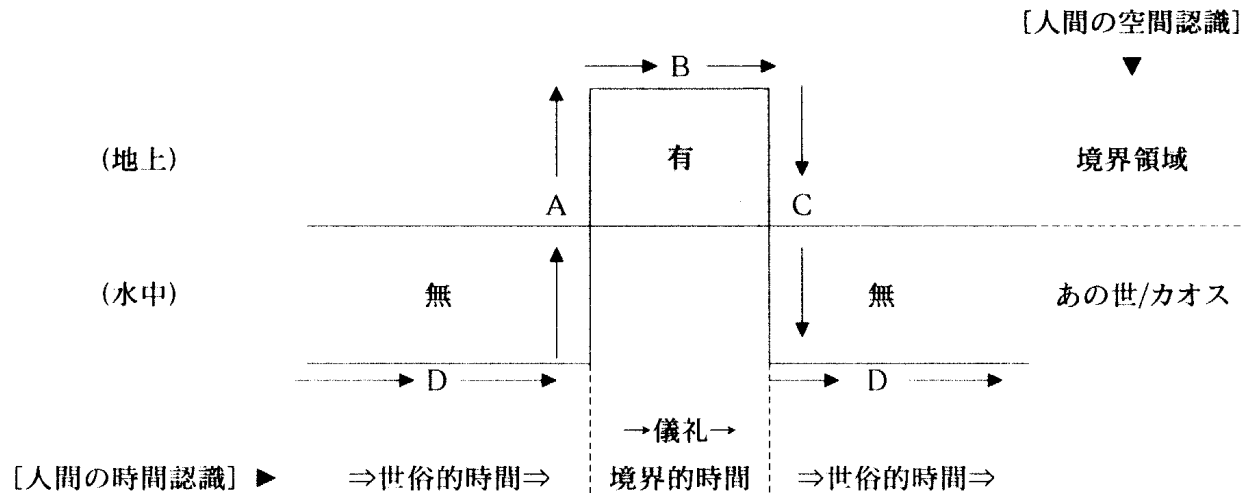
- 局面A 聖化の儀礼もしくは分離の儀礼。「道徳的人間」（儀礼の参加者、参加する社会全体—筆者）は、世俗世界から聖なる世界へと移される。かれは「死ぬ」。
- 局面B 境界にある状態。道徳的人間は聖なる状態にいる。一種の仮死状態、社会の日常的時間はとまる。
- 局面C 脱聖化の儀礼、あるいは集団の儀礼。道徳的人間は、聖界から俗界へ戻される。彼は「再生」する。世俗的時間があらためて始まる。
- 局面D これは正常な世俗生活の局面。次々と行われる祭りの間隔期。<sup>22</sup>

先に〔図表3〕で示したシュリクンとルサルカにおける「時間」「存在」「空

<sup>22</sup> リーチ、エドモンド「時間とつけ鼻」『人類学再考』青木保、井上兼行訳、思索社、1990：227-228。

間」の状態を、リーチの図に即して表すと以下のようなになる。

〔図表 5〕



〔図表 4〕、〔図表 5〕における局面の意義を比較すると以下のようなになる。

〔図表 6〕

	儀礼の参加者 (参加する社会全体)	異界の存在
局面A	分離／死	無から有へ／再生
局面B	境界状態／仮死状態	境界状態／有／生の状態
局面C	聖なる世界から世俗へ／再生	有から無へ／死
局面D	正常な世俗生活／生の状態	無／死の状態

このように、暦上儀礼に現われる異界の存在と、暦上儀礼に参加する人間の時空間の構造は意義が反転した形で対応しており、それぞれの時空間が重なるのは、儀礼によって一時的に地上に生じた境界の時空間（〔図表 4〕では「聖」、〔図表 5〕では「有」の部分）である。ここにおいて、異界の存在と人間の間の距離はもっとも近く、またその区別はもっとも曖昧となる。なぜなら「生」の状態にある異界の存在はより人間に近い形でイメージされ、反対に「仮死状態」、つまり価値観の転倒したカーニバル的時空間における人間は異界の存在のイメージに歩み寄るためである。したがって、暦上儀礼に現われる異界の存在に

においては、暦上儀礼における人間の姿や行為が投影されていると考えられる。それと同時に暦上儀礼自体の諸要素も異界の存在のイメージにさまざまな影響を与えているといえる。そこで、「同質の時空間を共有するシュリクンとルサーカの間に見られる属性の差異」の基盤と考えられる「スヴァートキ」と「聖霊降臨祭」の儀礼内容を確認しておきたい。

### 3. スヴァートキと聖霊降臨祭

まずスヴァートキにおける儀礼的行為として代表的なのは、仮装、コリャダー（仮装した若者たちがグループを作り、「コリャダー」と呼ばれる歌を歌いながら家々を門付けして回る）、また一年を通じてこの時期もっとも盛んに行われる各種の占いである。

ロシアにおいては、スヴァートキ、マースレニツァ（謝肉祭。2月末から3月始めに当たる）、聖霊降臨祭、聖ヨハネ祭といった暦上儀礼、また結婚儀礼や葬式といった人生儀礼において仮装が見られるが、特にスヴァートキに特徴的であるといわれる<sup>23</sup>。スヴァートキの仮装に参加するのは、原則的に未婚の男女であるが、それほど厳密に守られているわけではない。仮装の対象としては、①動物〔馬（北・中部ロシア）、牛（南ロシア）、山羊、羊、熊、狐、犬、狼、鶴、鶏等〕、②異界の存在（祖先、悪魔、死神、ヤガー婆さん、マローズ爺さん、「死人」、「死」等で、後者二つはスヴァートキに行われる遊戯の中でよく見られる<sup>24</sup>）、③聖者（東スラヴでは稀、西スラヴに多い）、④他者（ジプシー、ドイツ

<sup>23</sup> 仮装について、ゼレーニン<sup>23</sup>は結婚儀礼とスヴァートキにおいて特に顕著であると指摘している。プロップはスヴァートキとマースレニツァに見られると述べた上で、マースレニツァの仮装はスヴァートキからの借用と見ており、ソコロヴァも同様の意見である。Зеленин Д. К. Восточнославянская этнография. -М., 1991, -С.381; Пропп В. Я. Русские аграрные праздники. -М., -2000 (初版 1963 年), -С.145; Соколова В. К. Весенне-летние календарные обряды русских, украинцев и белорусов XIX - начало XX в. -М., 1979, -С.49.

<sup>24</sup> 内容としては、「死人」「死」の仮装をして横になった若者に娘たちがキスをする、というものが多く、突然起きて捕まえようとする「死人」「死」から逃げなければならない。

人、ユダヤ人といった人種的・民族的他者、あるいは貴族、兵士などといった社会的他者)など、さまざまである<sup>25</sup>。しかし、これらの一見ヴァラエティーに富んだ仮装は、実は外見的には互いに似ていることが多い。Л. Н. Виноградовは、19世紀末から20世紀前半の資料に基づいて、スヴァートキにおける「ヤギを連れた老人」「乞食」「悪魔」の仮装が、「裏返しに着たコート」「背中の瘤」「付け髭」といった点で共通していることを指摘している<sup>26</sup>。チーチェロフも、「ジプシーの仮装＝裏返しの毛皮のコート、もしくは古い毛皮の短コート／房付き帽子／手には鞭」、「ジプシー女の仮装＝全身真っ赤な衣装／大判スカーフ／お下げ髪／手にはトランプ」といった定番のスタイルがある一方で、「乞食」「老人」「背の曲がった男」「老婆」といった仮装が、「裏返しの毛皮のコート」「背中の瘤」「麻製の髪や髭」といった点で似ていると指摘している<sup>27</sup>。ロシアの仮装について詳細な研究を行った Л. イーヴレヴァは、何に仮装するにしても、手近にあるものを利用し、現実にはありえない奇妙で逆さまの状態を作り出すことに主眼が置かれると指摘している<sup>28</sup>。つまり、「何」に仮装しているかは、本人の意識ないし周囲の認識に負っている面がある。

仮装手段としてよく見られるのは、①外套を裏返しに着る、②顔を黒く（白く）塗る、③根菜で歯を作る。④亜麻などの繊維を頭に被る、⑤瘤をつける、⑥角や尻尾をつける、⑦仮面や布で顔を隠す、⑧異性の服を着る等である。これらを組み合わせることによって上記のようなさまざまな仮装が作り出される。仮装者の行為はある程度類型化することができる。基本は、「グループを作って家々を回ること」で、その途上において、①家の人や子どもを怖がらせる、②娘を追い掛けまわす、③意味不明の声や音を発する、④寸劇（死をモチーフ

<sup>25</sup> Валенцова М.М.; Виноградова Л. Н. Ряженье//Славянская мифология: Энциклопедический словарь. -М., 1995, -С.343-344; 坂内徳明「新年を迎えるロシア人の民俗」『ロシア語ロシア文学研究』第9号、1977: 33。

<sup>26</sup> Виноградова Л. Н. Зимняя календарная поэзия западных и восточных славян. -М., 1982, -С. 150-151.

<sup>27</sup> Чичеров В. И. Зимний период..., -С.209-210.

<sup>28</sup> Ивлева Л. Ряженье в русской традиционной культуре. -СПб., 1994, -С.155-157.

にしたものが多い）を演じる、⑤家を浄める、⑥祝いの準備ができているかどうか点検する、⑦ご馳走を振る舞われ、贈り物をもらう、⑧歌う、踊る、⑨悪戯をする、等の行為が行われる<sup>29</sup>。筆者が調査した限りでは、近年では⑦⑧⑨の要素が特に強いようだ。仮装は元来異教的行為とされていたが<sup>30</sup>、時代が下るに従い、キリストの降誕祭に由来するコリャダーと融合していったものと考えられる。

またスヴァートキは、占いが最も盛んに行われる時期でもある。それは、この時期の占いや儀礼が、これからの1年を規定するという特別な意味を持つためである。こうした観念は、スヴァートキの12夜を12ヶ月に見たて、第1夜に1月の運勢、第2夜に2月の運勢…と、新しい1年の運勢を占う方法においても見て取れる。またその種類も豊富で、「皿下の歌」に合わせて行われる占いが特によく知られるが、他にも、氷の穴に浸した木片を枕の下に入れて夢占いをしたり、投げて落ちた靴の向きで未来の夫がどこにいるかを占ったり、卵の白身やロウソクを水の中に垂らして吉凶を占ったり、鶏が誰の餌から食べ始めるかで結婚の順番が占われたりする。占いの主体は未婚の女性である場合が多く、内容的には第一に結婚、その他に死や健康、金銭運について占われる。

次に、聖霊降臨祭の時期に行われる儀礼行為には、農耕儀礼的、植物崇拜的、死者的（埋葬、供養）要素が重層的に認められる。たとえば、「白樺や藁人形を畑や水中もしくは村外れで廃棄する（＝置いてくる／解体する／流す／焼く等）」といった、模擬葬式的儀礼的行為がある。B. Я. プロップは、こうした事例は全ヨーロッパ的に見られ、全体的に検討する必要があること、また、それらは互いに共通性を持つが、地域や時代によって多様なヴァリエーションがあり、どの要素が本来的でどの要素が借用か、どの点が古くどの点がより新しいかを

<sup>29</sup> Валенцова М.М.; Виноградова Л. Н. Ряженье..., -С.343-344.

<sup>30</sup> 仮装の起源については定かではないが、スラヴ神話学事典によれば、今日の仮装と類似の習慣についてはすでに12世紀の文書において言及されている。さらに時代が下り1551年に制定された『百章』第93章においては、皇帝および教会権力の側から異教的行為として、仮装は非難・弾劾の対象となっている。Валенцова М.М.; Виноградова Л. Н. Ряженье..., -С.343; Емченко Е. Б. Стоглав: Исследование и текст. -М., 2000, -С.403.

確定することが困難で、一様には解釈し難いと述べている。しかしその上でなお、ロシアにおける上記のような一連の儀礼的行為が、人形を死に到らしめることで大地を再生、再活性化させる農耕儀礼的な意義を多分に含むと解釈している<sup>31</sup>。一方 H. H. ヴェレツカヤは、フレーザー理論に全面的に依拠したプロップのこの解釈に疑念を示している。ヴェレツカヤによれば、これらの儀礼的行為の背景には、異教時代のスラヴにおける、死期を迎えた高齢者を人里離れた場所に放置する(もしくは水中に没する)、いわゆる姥捨てに近い風習の痕跡が見て取れるという。すなわち、儀礼において「水中に投げ込まれる藁人形は人間の代用」であり、「春から夏にかけての暦上儀礼において木の枝を水中に投げ込むのは、かつて『あの世』に送る者を水に沈めた名残りであろう」と解釈している<sup>32</sup>。

また、この時期に家屋や教会や道が草花や樹木で飾られ、装飾を施した樹木(特に白樺)や輪状に編んだ枝や花輪が村や人家に運び込まれるといった行為においては、植物の生命力を享受しようという、植物崇拝の要素が認められる。他にも白樺の枝や草花で作った冠を頭に載せる、樹木の枝を編む、隣り合った白樺の枝を縛ってブランコ状のものを作る、装飾を施した白樺の下や秋まき穀物畑で儀礼食を食べるなど、植物が何らかの形で参与する儀礼はこの時期特に多い。

一方セミーク(復活祭後の七番目の木曜。聖霊降臨祭前もしくは後の木曜)の儀礼は、特に死者供養と深い関わりを持つとされる。Д. К. Зеленинによれば、東スラヴにおいてはこの時期に死者、とりわけ母なる大地に受け入れられない不浄な死者たちのための異教的な埋葬と供養の儀礼が行われた<sup>33</sup>。これらの儀礼は異様に陽気な雰囲気の中で、死者を慰め、悪霊や病気を追い払う音楽や

<sup>31</sup> Пропп В. Я. Русские аграрные праздники..., -С.111-112.

<sup>32</sup> Велецкая Н. Н. Языческая символика славянских архаических ритуалов. -М., 1978, -С.87-88.

<sup>33</sup> Зеленин Д. К. Избранные труды: Очерки русской мифологии..., -С.129-140.

口笛、卵を使った遊戯を伴って執り行われ、卵や粘土製の玉や人形が死者に捧げられたという<sup>34</sup>。

スヴァートキと聖霊降臨祭におけるこうした儀礼的諸要素は、それぞれの時期に出現するシュリクンとルサールカという異界の存在の行為や容姿の上に、いろいろな形で投影されている。たとえばシュリクンにおける、スヴァートキに「複数」で「地上を徘徊」し、「人間に悪戯をする」といった行為、あるいは「小さく」「尖った頭部を持つ」といった外見は、スヴァートキにコリャダーに参加した仮装した若者や子どもたちの姿と重ね合わせることができる。またフォークロア資料においては、シュリクンがスヴァートキの占いに何らかの形で関わる例もいくつか見られる。さらにスヴァートキに仮装をした人間が「シュリクン」という名前と呼ばれることもある。比較的新しい資料においては、「スヴァートキにシュリクンが子どもたちに贈り物を持ってくる」という例が見られるが、これは、ヨーロッパ起源のクリスマス・プレゼントの習慣からの影響と思われる。このように、シュリクンはスヴァートキという限られた時期における儀礼的要素を、直接模倣ないしは間接的に関与するという形で体现しているといえる。

一方ルサールカの容姿や行為においては、聖霊降臨祭時における死者供養、植物崇拜、農耕儀礼に関わる要素が顕著に、また重層的に現われている。たとえば死者（供養）的要素としては「死者（特に不自然な死者）がルサールカになる」、ルサールカにおける「生者への敵対」「顔色の悪さ」「白装束（＝死装束）」「墓地にいる（去る）」「高笑い、歌、遊戯（＝異教的追善儀礼における陽気さ）」「卵で遊ぶ、輪舞（＝異教的追善供養における行為）」といった要素が挙げられる。また植物（崇拜）的要素としては、「森にいる」「木の上にいる」「木の上で

<sup>34</sup> この時期に異教色の強い死者供養が行われたことは、16世紀の『百章』第41章第23問に記録がある。またA. B. テレーシチェンコもこの時期に横死者の埋葬や供養が行われたと述べており、プロップによれば、戦争や疫病、飢饉などによる死者も聖霊降臨祭の時期に埋葬されたという。Емченко Е. Б. Стоглав..., -С.313; Терещенко А. В. Быт русского народа: Ч.2-3. -М., 1999, -С.320; Пропп В. Я. Русские аграрные праздники..., -С.24.

ブランコ遊びをする」「編まずに垂らした緑色の髪（＝植物そのもの）」が、農耕儀礼的要素としては、「畑（ライ麦畑）にいる」「ライ麦の開花時にいる」「穀物の生育に影響を与える」といった点が挙げられる。このように、ルサルカにおいては、聖霊降臨祭の時期における儀礼的要素が複雑に絡み合って現われている。

また曆上儀礼と関わる要素として、シュリクンにはない、ルサルカにおける際立った「女性性」<sup>35</sup>についても触れておくべきであろう。上記のようにルサルカは植物崇拜、農耕儀礼と関わる異界の存在である。大地の豊穡や植物の生育が、妊娠や出産といった女性的機能と重ね合わせて捉えられ、それらを司る神格が女性のイメージで描き出されることは、古代ギリシアのデーメーテルや古代ローマのケレースを初め、古来より普遍的に見られる現象である<sup>36</sup>。ルサルカにおける強い女性性は、まずその点において解釈される。さらに、ルサルカが現われる境界的時間自体にも女性性を求めることができる。つまりスラヴの神話的イメージにおいては、特に夏期に女性的な異界の存在が活発になること（聖ヨハネ祭前夜における魔女等）、また夏期の儀礼で中心的役割を果たすのが女性であること（聖霊降臨祭における諸儀礼／東スラヴにおける白樺の枝を利用した儀礼や義姉妹の契りを結ぶ儀礼／旧ユーゴスラヴィア諸地域におけるクラリツェ、リエリエ、ルサリエと呼ばれる娘たちだけの儀礼的行進等）から、夏期は「女性原理が特に強く働く時間」としてとらえることができるという<sup>37</sup>。とすれば、特にこの時期に出現するルサルカに強い女性性が付与されるのは自然なことである。こうした二つの要素（大地母神・農耕神的イメージ／夏期の出現）が、妖怪としてのルサルカにおける強い女性性の基

<sup>35</sup> たとえば J. ハップスは、ロシアにおける伝統的な女性的イメージを代表する存在のひとつとして、ルサルカを取り上げ検討している。Hubbs, Joanna Mother Russia: the feminine myth in Russian culture. -Bloomington: Indiana University Press, 1988, -P.27-36（邦訳ハップス、ジョアンナ、『マザー・ロシア』坂内徳明訳、青土社、2000：48-58）。

<sup>36</sup> エリアーデ、ミルチャ、『大地・農耕・女性』堀一郎訳、未来社、1968：104-112；232-234。

<sup>37</sup> 伊東一郎「ルサルカ・ルサーリヤ・ポルードニツァー——スラヴ神話における時間の人格化をめぐる」、14-15。



盤を成しているといえよう。

一方、シュリクンにおいては性別はどのような形で現われているのであろうか。結論から言えば、シュリクンにおいては突出した男性性・女性性は見られず、性差は解消されているといえる。フォークロア資料において見られる「複数」「小さい姿で大勢で外をうろつく」といったシュリクンのイメージは、スヴァートキにおける子どもたち、つまり性差が現われる以前の幼児、子どもの姿と繋がっているといえよう。またシュリクンが深く関わるスヴァートキの仮装においては、「異性の服装」による性の転倒がしばしば見られるが、こうした現象も、シュリクンという異界の存在における性差の解消、無性別性の要因を成してといえると考えられる。

このようにルサールカにおける女性性、シュリクンにおける無性別性も、聖霊降臨祭、スヴァートキという、これらの妖怪が現われる時期の儀礼の面から解釈することが可能である。

## 結び

本報告では、フォークロア資料に登場するシュリクンとルサールカについて、まず時空間的特徴における共通性を確認した上で、それらの属性の差異の要因として、それぞれが現われる時期に執り行われる暦上儀礼を取り上げて検討した。その結果、これら「一定の時期に出現する」異界の存在における特徴においては、その時期（季節）の諸要素、特に儀礼的要素が強く反映、関与していることが分かった。Д. К. Зеленинは、シュリクンを「春の雪解け」「河川の出水、氾濫」の人格化、ルサールカの出現を「死者の出現」と個別に解釈した<sup>38</sup>。しかし、むしろこれらは「暦上儀礼において一時的に地上に生じた境界的時空間に現われる異界の存在（あの世の存在＝死者）」というレベルでは同質であっ

<sup>38</sup> シュリクンについては Зеленин Д. К. Задочные водяные демоны «шуликуны»..., -с. В237-238。ルサールカについては Избранные труды: Очерки русской мифологии..., -С.294-296。

たものが、その時期における儀礼その他の諸要素によって個性化されたものといえよう。すなわちシュリクンとルサールカは、模倣や関与といった形でスヴァートキ、聖霊降臨祭時の諸要素と関わっており、いわばこれらの儀礼の人格化という一面を持っている。

以上